

ラジオ放送
＜平成30年10月～12放送分＞

ON AIR



金光教の声

No.425

もくじ ~ contents

<あなたへの手紙>

☞ 悩みや疑問にお答えするQ&A

- 第1回 息子にイライラ／夫の母が熱心な信者 *page 1*
- 第2回 結婚願望のない娘／教会へのお供えはいくら？ *page 5*
- 第3回 挨拶しない隣人／ラジオ放送はいつから？ *page 9*
- 第4回 お参りする目的は？／学業よりアルバイト？ *page 13*

<先生のおはなし>

☞ 金光教の先生のお話です。

- 水はいのちの元 *page 17*
富山県・富山教会 三浦義雄

<信者さんのおはなし>

☞ 信徒の体験談です。

- 今、天地の開ける音を聞いて目を覚ませ *page 21*
- 息子に手を差し伸べられて *page 26*
- あなたのこと、祈りよるけん *page 31*
- 教会は元気の源 *page 35*
- 一死なない親に守られて *page 39*
- お邪魔にならない生き方をなさい *page 44*
- つらい顔は息子に見せない *page 48*
- よう来たなあ *page 52*

「息子にイライラ

／夫の母が熱心な信者」

おはようございます。窓を開ければ、富士山が見える。そんな美しい景色が楽しめる静岡県にある金光教静岡教会の岩崎弥生です。

早速ですが、今日、最初の質問は、44歳、パート勤めをしているお母さんからの悩みです。

「私の息子は、高校生で運動部に入っています。毎日、朝から晩まで部活の練習に励んでいます。家に帰ってくると、夕飯を食べ、お風呂に入るとすぐに寝てしまいます。部屋も散らか

ったままで、何度注意しても、一向に片付けようとしません。そんな息子を見るとイライラが募ってきてしまいます。どうしたらよいでしょうか」

このようなお尋ねです。

そうですね。お母さんの気持ち、よくわかりますよ。私も、この質問を読んで、高校生だった息子のことを思い出しました。

私の息子も運動部で、夜、へとへとになって帰って来ました。私は、台所で、すぐに温かい夕飯を食べさせてやろうと、色々おかずを温めて待っているのですが、息子は、かばんを置きに行ったはずの自分の部屋から、一向に出てきません。おかしいなと思って見に行くと、そこ

でもう力尽き、寝ているのです。やっこの思いで起こし、食べ終わり、お風呂に入ると、またそこで寝ている！

「また寝てる！」と言って、私もイライラしていました。が、その時ふと、息子が赤ちゃんの時のことを思い出しました。

息子は神経質で、ちょっとした物音でもすぐに目を覚ます子でした。「せめてあと30分寝ていてくれたら、家事がはかどるのになあ」と、赤ちゃんの時は、寝ないことで手を焼きました。それが、知らない間に、どこでも寝れるほど、たくましく成長していたんだなと思い直し、そう思ったら笑えてきました。

今ではその息子も、社会人になりました。親元を離れて、炊事も洗濯も自分でして、仕事を

するまでに成長しました。

あなたの息子さんは、ちゃんと食べてお風呂に入って寝てくれるんですから、まだまだ救われます。つい、子どもの将来のことを考えて、

「この先このままだったら、どうなるか」と、親は心配してしまいます。そんな時こそ、まずは、これまでのことを振り返り、「ここまで健康で育った。運動ができる。まじめに厳しい練習にも取り組んでいる」というように、「よくぞここまで」という気持ちになれば、心配が少し軽くなってくるのではないですか。

成長していくと、言ってもなかなか親の思い通りにならないことが多くなりますよね。そんな中で、親のできることで、とにかく我が子を信じて、「よくぞここまで育ってくれた。ど

うぞここからも」という思いで、「生きる力がつきますように」と願い続けることなのかなあ
と今は思います。

次は、神奈川県にお住まいの田中亜紀さん、
30代の女性からの質問です。

「私は、昨年結婚しました。夫の母親は、熱心な金光教の信者らしく、毎日、教会に参拝していると聞きました。金光教に入信すると、毎日教会に参拝しないといけないのですか」

このような質問です。

亜紀さん、ご結婚おめでとうございます。亜紀さんがそう思っている、という訳ではありません

せんが、結婚相手の母親が、何やら宗教をやっている毎日参拝していると聞くと、最近はずぐ、「だまされているんじゃないか」「参拝を強制されているのでは」と思う方もいらっしゃるようです。でも、金光教では、参拝を強制するようなことはありません。自由です。本人が教会へ行きたいなあと思う時、いつでも参拝でき、反対もわかりです。

また、参拝するというと、一般的には、神様に一方的に願いを聞いてもらうというイメージが強いと思います。金光教では、参拝して教会の先生に、起きてきた出来事、悩みなどを聞いてもらい、どうしたらよいか一緒に神様に祈ってもらいます。そして、教祖様の生き方に習って、これからどうしていくことが幸せにつながる

がるのか、教会の先生に教えてもらいながら、自分の生き方を見直していくという中身もあるように思います。

教会参拝と生き方のお稽古を、裁縫で例えてみたいと思います。家庭科の時間にミシンを使いましたよね。その時のことを思い出してみてください。布と布を合わせてミシンで縫う時、まち針を使って縫えば、ずれることなく縫うことができます。

まち針を所々打つように、その時々で教会に参拝したら、神様をお願いして物事に取り組みますので、心配事も悩み事もみんな神様に預けて、安心して物事を進ませてもらえます。

まち針だけでなく、さらに、しつけ糸をかけてからミシンで縫うと、よりずれずに真っ直ぐ

きれいに縫うことができましたね。お母さんの参拝は、しつけ糸をかけているようなものではないでしょうか。教祖様の生き方にずれぬよう、幸せになれるよう、一針一針縫うように、毎日参拝して、生き方のお稽古をしているように思います。

亜紀さんも、一度教会に來られてはいかがでしょうか？ きつとお母さんの気持ちが分かるのではないかと思います。



「結婚願望のない娘

／教会へのお供えはいくら？」

おはようございます。金光教墨染教会の松岡
光一です。

滋賀県にお住まいの60代の女性からのお尋ね
です。

「私には、実家住まいの40歳目前の娘が一人
います。仕事が楽しく、一人でいるほうが気楽
だからと言って、困ったことに、全く結婚願望
がないようなのです。お付き合いをしている人
はいるみたいなのですが、お互い同じ気持ちなら

しく、親に紹介すらしてくれません。昔に比べ
て結婚も遅くなっていますし、色んな生き方が
あるのもテレビを見ていて分かりますが、私か
らしてみれば、今は良くても将来一人では寂し
いだろうし、まだ孫の顔を見たいという気持ち
も諦めきれません。どうか考えを改めてもら
おうと口酸っぱく言っていると、娘と口論にな
ってしまうこともしばしばあります。どうした
ら、娘が結婚に前向きになってくれるのでしょ
うか」

このようなお尋ねです。

そうですね。親とすれば、娘には、結婚し
てほしいし、お付き合いをしている方があるな
ら、なおさらそう思いますよね。それにしても、

お話を聞かせていただくと、娘さんのことを本当に大切に思っておられるお母さんなんだなあと、その優しさを感じます。口やかましく結婚のことを仰るのも、娘さんに幸せになつてもらいたいという、愛情の現れなんだと思います。

ただ、少し背負い過ぎておられるのではないのでしょうか。大切な娘さんですから、放つておくようなことはできないかもしれませんが、お母さんが背負っておられるものを一旦おろしてみてもどうでしょうか。

金光教には、「心配する心を神に預けて、信心する心になれよ。おかげになる」という教えがあります。娘さんの先々の心配を一人で抱え込まず、神様にお願ひしていくことをされてはいかがでしょうか。

それともう一つ。親子に限らず、自分の意見を押し通そうとすると、どうしても争いが起きてしまいます。娘さんの気持ちを自分に合わせるように変えようとするのではなく、あなた自身の心持ちを変えてみてはどうでしょうか。娘がここまで立派に成長してくれたこと、仕事も頂けて生活ができてきていること、お付き合いをしている男性がいてくれること、そのことを、「ありがたいことだ」と喜んでいく。そんな心持ちになられてはどうでしょうか。そこから、娘さんとの関係も変化し、新しい道が開かれてくるように思います。

次に奈良県にお住まいの70代の女性からのお尋ねです。

「少し前に、友人に誘われて、金光教の教会に初めてお参りしました。なかなか誰にも言えないでいた家族とお金の話など、心の底にずーっとたまっていた気持ちを何時間も先生が聞いてくださり、一緒に神様をお願いをしてくださいました。ただ、ご祈祷料をいくらお供えしたらいいのか分からず、先生に聞いてみても、『決まった金額はありません。お心次第です』と言われ、大変困りました。年金生活なので、そんなに大きな額は払えませんが、少な過ぎると失礼になってしまうのでは、とと思ってしまいます。どうしたらいいのでしょうか」

このようなお尋ねです。

教会にお参りされて、心が軽くなったのと、良かったですね。でも、お供えのことで、せつかくすつきりした心をまたモヤモヤさせてしまったようですね。おっしゃる通り、はっきりと金額を示してもらったほうが、変に気を使わなくてすつきりするかもしれません。

ただ、一つ分かっていたいただきたいことは、ご祈祷料とおっしゃっているものは、神様へのお礼のお供えであって、それは、決して教会の先生の働きに対する、いわばサービスに対して支払っているものではないということです。

金光教の教祖様は、お供えに関わって、次のような教えを残しています。

「金光大神は金銭を目当てに拜むのではない。難儀な人を助けなければならぬから、『お供

えのことを思わないで、こづかいだけのくり合わせを受けられた時に参りなさい』と話しているのである。信心しておかげを受けた時に、心任せのお供えができるようになれば、供えた者も喜びであらう」

この教えにあるように、教会の先生も、金銭を目当てに日々の勤めをされているではありません。難儀な方に、一人でも助かっていただきたい。金光教の信心に触れ、生き方が改まり、助かっていかれることを願いとされているのです。

お金というのは、大きな力を持っていますから、取り扱いを間違うと、こちらがお金に振り回されることがあります。

神様へのお供えについても、そのことで、か

えって人を痛めることになりかねない危うさを持つているのです。ですから、金光教では、それぞれの喜びの心からお供えするあり方を大切に行っているのです、お供えの額は、お心次第ということになるのです。

世間体などは気にせず、自分に納得のいく、もっと言えば、お供えすることで、あなた自身が喜べる、そんなお供えが、神様へのお供えになるのだと思います

「挨拶しない隣人

／ラジオ放送はいつから？」

おはようございます。金光教松阪新町教会の

水野照雄です。

お一人目は、香さん、35歳の女性のお悩みです。

「夫と幼稚園に通う息子との3人で暮らしています。隣には、一人暮らしの70代の女の人に住んでおられます。ある時から、私とその人にあいさつをしても、無視されるようになり、そのうち、他のご近所の方も、私を避けるように

なってきました。何が原因か、全く分からず、

夫に相談しても気にするなと言うばかりです。

外に出ることも怖くなり、子どもを表で遊ばせ

てやることもできないような状態です。どうし

たらよいでしょうか」

このようなお悩みです。

香さん、それは、おつらいですね。無視されたり、避けられたり。その上、幼い息子さんにまで、何か危害が及ぶような不安を感じておられるようで、何ともやりきれない思いがします。

まず、感じたのは、香さんがお一人で悩みを抱えてしまっているということです。ご主人に相談しても思ったような答えがない。家族や友人や、他の誰にも相談することができない。そ

うだとすれば、それは本当につらいと思います。でも、一人で抱えてしまつてはいけないと思います。

きつともう何度も、ご主人にはお話しされているでしょうが、もう一度、ちゃんと聞いてもらつてはいかがでしょうか。こんな問題に一人で立ち向かつていくのは、無理です。まずは、夫婦で問題を共有して、少なくとも、気持ちを通わせておくことが必要でしょう。

その時大切なのは、あんなことがあつた、こんなことをされた、という「事件」ではなくて、香さんのつらい気持ち、不安な思いを、ご主人に伝えることだと思います。

その上で、解決策を探っていくことになるのですが、カギとなるのは、やはり、その一人暮

らしの70代の女性なのでしょうね。

香さんからは、その方がどのように見えていますか？ 嫌な人、意地悪な人、うつとうしい人、怖い人……。そんなふうに見えているのではないのでしょうか。

でも、ちよつと見方を変えてみることはできませんか？ ひよつとしたら、一人暮らしで寂しい人、あるいは、心に重荷を抱えた人なのかもしれません。若くて幸せそうな3人家族がまぶしいあまりに、ねたましく思つてしまつているのかもしれない。

もちろん、これは全部、想像です。でも、見方が変わると、何かが変わってくるということもあるかと思うのです。簡単なことだとは思いません。

どうか、ご夫婦で絆を深めつつ、問題を取り越えていくことができるよう、私も祈っています。

香さん、もしよろしければ、金光教の教会で、お悩みの続きをお話しになりませんか？ 金光教本部にお問い合わせいただきましたら、お近くの教会をご案内します。

次は、原田さん、67歳、男性の方のご質問です。

「先日、偶然ラジオを聴いていて、金光教のラジオ放送を聴きました。いいお話をしているなと思いました、いつからやっていたんですか？ ラジオ放送について、詳しく教えてください」

このようなお尋ねです。

原田さん、この朝早い時間に、ありがとうございます。ざいます。

お尋ねの件ですが、金光教のラジオ放送は、まだ戦後の混乱期、昭和26年に始まっています。日本で3番目の民放となる、大阪の朝日放送、今のABCラジオから、放送局を立ち上げるにあたって、「精神文化の向上のため、宗教番組を取り上げたい」という依頼がありました。つまり、「日本の人々の心が豊かになるような放送をしていきたい。そのために、宗教の内容を取り上げたい」ということだったので。そして、その年の11月、朝日放送開局と同時に、この金光教の番組が始まりました。それ

来、今年で67年。現在、ニッポン放送、東海ラジオ放送、RKB毎日放送でも放送されています。

戦後の混乱から復興、高度成長期、バブルとその崩壊、そして、平成も、もう30年。そんな、日本の社会の移り変わりの中、ずっと放送を続けてきました。

今では、民放の全ての番組の中でも指折りの長寿番組になっています。ここまで続けられたのも、聴いてくださる皆さんのおかげです。

現在、放送しているのは、今日のような、質問やお悩みにお答えする番組、その他、ドラマや金光教の信心をしている人の体験談などです。これまでも、色々なものを制作してきましたが、その願いは、最初の頃から少しも変わ

りません。聴いてくださる皆さんの心が豊かになるように。そう願って、いつも放送をお届けしています。

ご質問くださった原田さん、そして、この放送を楽しみにして、早起きをしてチャンネルを合わせてくださった方、たまたま耳にしてください。家事や仕事をしながらの方、今から仕事に出掛けられる方、逆に一仕事終えたところという方、寝付けないまま朝を迎えてしまった方もあるかもしれません。

聴いてくださった全ての皆さんにお礼申し上げます。今朝の放送をお聴きくださってありがとうございます。そして、皆さんに、とって、今日が心豊かな一日でありますように、心からお祈りします。

「お参りする目的は？」

／学業よりアルバイト？」

おはようございます。佐古教会の木村道江です。和歌山県にお住まいの29歳の男性、坂本さんからのご質問です。

「両親が金光教を信心しています。私に教会へ行けとは言いませんが、父も母もしょっちゅう教会に通っては、何やらお祈りをしているようです。しかし、そのわりには、我が家に特別いいことが起こったとも思えません。両親のやっていることに意味があるのでしょうか」

このようなご質問です。

ご質問、ありがとうございます。

ご両親が時間を掛けて、せっせとお参りしているのに、特別いいことがあるように思えないとなると、何のためにそんなに教会に通っているのか、疑問に思いますよね。坂本さんがそう感じるのも、もつともだと思えます。

では、坂本さんにとって「特別ないいこと」というのはどういうものでしょうか。宝くじに当たったり、素敵な人からいきなり告白されたりと、思いもよらないことが起こることでしょうか。

私が奉仕する教会にも、坂本さんのご両親と同じように、熱心に参って来られる方々がいら

つしゃいます。教会にお参りされる理由は、叶えたいことがあるからとか、心の中で引つ掛かっていることを吐き出したいからとか、うれしいなあと思ったことを神様にお礼をしたいからとか。そんなふうに、それぞれ違います。

けれど、そうやってお参りに来られた方々は皆さん、神様にお祈りしたり、教会の先生と話しているうちに、どんどん喜び上手になっておられるなあとは感じています。

例えば、職場の上司のことで悩んでいた女性がいきました。その上司があまりにも自分勝手に、それが嫌で嫌でたまらず、そんな状況をどうにかしたいと思つて、参拝を始めたそうです。

ところが、教会で、「神様にとつては、どんな人でもみんな、大切な子どもなんですよ」と

いう話を聞いているうちに、どんどんと上司への考え方が変わつていったそうなんです。

今、一番可哀想なのは誰なのか、それは自分じゃなくつて、皆に嫌な思いをさせていることに気付いてない上司本人なんじゃないのかなつて、そう思えるようになってたんです。それからは、上司のことを折れるようになって、上司との関係もだんだんと良くなつていったそうですよ。

こうやつて、お参りしていると、自分だけではなかなか気付けない、全く新しい考え方に合うことがあります。そうやつて、生き方もつと良いものになつていく。これも、「特別ないいこと」になるんじゃないでしょうか。

坂本さん、ご両親に対して、何でこんなに喜

べるんだらう。なんでこんなに前向きに考えられるんだらうって思ったこと、ありませんか？
そのもとを、ご両親は、実は教会で作られているのかもしれないね。

次は、50代の女性からのお悩みです。

「大学2年生になる娘のことです。娘は、大学に入ってから、カフェでアルバイトをしています。だんだん責任のあることを任せられています。本人もやりがいをもってやっています。それはありがたいのですが、最近、早朝と深夜の時間帯のバイトが増えました。娘は、バイトには遅刻なく出掛け、最後までやり遂げているみたいですが、先日寝不足がたたり、学校を休みました。私は、本業である学業がおろそかになるの

では本末転倒だと思い、娘に話しましたが、バイトでも責任があるんだと申します。どうしたらよいでしょうか」

このようなお悩みです。

バイトが悪いとは思わないけれど、そちらに掛かりっ切りで勉強がおろそかになっては：と、すごく心配になりますよね。

私は、このお話を聞かせてもらって、とても素晴らしい娘さんをお持ちだなって思いました。だって、本人が責任感を持って、任されたことをやり遂げて、周りからも信頼を得られている。これって、なかなか出来ることじゃないですし、娘さんもすごく頑張られたんだと思います。

大学2年生ということでしたが、私はこの、
大学生という期間は、自分の行いに自分で責任
を持つことを学べる大切な時期でもあるかなと
思っているんです。今回のことは、娘さんにと
っては、それを学ぶ良い切っ掛けになるんじゃない
でしょうか。

じゃあそんな時に、お母さんの方はどうして
いけばいいのか、本当に難しいところだと思
います。

金光教には、親子の関係について、こんな歌
があります。

「ちちははも子どもとともに生れたり そだた
ねばならぬ子もちちははも」

この、子どもとともに生まれるっていうのは、
子どもが生まれて初めて、自分も「親」って

う存在になれる。つまり、親も赤ん坊と一緒に
色んな経験をしながら子どもと一緒に育ってい
く。そういうのが親子なのかなと、私はこの歌
から思わせてもらっています。

ですから、今回のことはお母さんにとっても、
自立していく子どもの親として、新たな子育て
の段階に入った。そんな切っ掛けをもらったん
だと思ってみてはどうでしょうか。

娘さんのことを思うお母さんの気持ちはちゃ
んと伝わっていると思います。ここからは娘さ
んのことを少し距離を置いて見守りながら、時
には悩みを聞いたり、一緒に考えたりしながら、
応援してあげてはいかがでしょうか。

娘さんが良い学生生活が送れるように、私も
お祈りさせていただきます。

《先生のおはなし》

「水はいのちの元」

富山県・富山教会 三浦義雄

私が奉仕している教会は、北陸地方の富山県にあります。

富山県は、県境に立山をはじめ、高い山々があり、冬には雪で真っ白になります。その雪解け水が平野部に流れ、豊富な水を恵んでくれています。ですから、水道水もおいしく、最近では水道水をペットボトルに詰め、「富山の水」というネーミングで広く販売しているほどです。

地球は「水の惑星」と言われます。地球の表

面は7割が水で覆われ、宇宙から見ると青く輝いています。地球に海が出来たことで、太陽系の中ではただ一つ、生き物がたくさん住む星となりました。また、人間の体の6割、脳に至っては8割が水、と言われています。

このように水はいのちの元であり、私たちは、空気や食物と同じように、水が無ければ生きていくことができません。でも、水に不自由のない生活に慣れ、いのちの元である水への感謝を忘れてしまいがちです。夏の喝水や、災害によって水道水が出なくなるなど、水に不自由し、改めて水のありがたさを思い知るのです。

私は小さな頃から耳に持病があり、大人になってからも、具合が悪くなると、病院で処方された薬を飲んでいました。ところが、ある日、

薬を頂いた後、指の先から頭のとつぺんまでかゆくなってきました。全身にじんましんが出てきたのです。その日は夕方から町内の役員会があり、病院に行く時間がありません。かゆみはどんどん増してきます。その時、弟が話してくれたことを思い出しました。

弟は以前、ある温泉で宴会料理を頂いた後、全身にじんましんが出てきました。その時、教会長である父が同席していました。弟は父に、どうすればいいか、尋ねました。すると、「お水をたっぷり頂きなさい」と言われ、弟はトイレに行ってお祈りしながら何度も水を頂きました。すると、しばらくしてじんましんが治まった、ということでした。

その話を思い出し、私は2リットルのペット

ボトルに水を入れ、それを持って町内の役員会に行きました。会合の間、心の中で神様に祈りながら、時々ペットボトルのお水を頂き、会合が終わるまでに2リットル全部飲み干しました。

すると、頭のとつぺんや指の先から次第にかゆみが薄れていき、会合が終わった時には、体中のかゆみがなくなって、じんましんが治まったのです。「すごいなあ」と思いました。水にこんな不思議な力があるのだと実感し、ありがたいなあと思いました。

古い話になりますが、明治16年、初めて金光教祖の元に参拝した桂松平という方がいます。

その方は、胃腸が悪い家系で、とりわけ飲み水に人一倍気を使っていました。その方に教祖は、

「水が毒というが、水を毒と思うな。水は薬という気になれ。水を薬という気になれば、腹の病気はさせない。水あたりということも言うな。水がなくては一日も暮らせまい。水の恩を知れよ」といった内容のことをおっしゃったそうです。

また、斎藤宗次郎という方が参拝し、「水を飲むとおなか痛くなり、食べ物も胸につかえ、10年余りも困っています。どうぞ、お助けください」と願い出た時、教祖は、「水を飲む時にも、食事をする時にも、体が丈夫になるように神様にお願ひし、ありがたく頂く心で飲み食いをさせてもらいなさい」と諭されました。

教祖は、「食物は、わが心で毒にも薬にもなるものである」とも教えられています。水や食

物、いのちあるものを生かし育む天地のお恵み、神様からの賜り物として、ありがたく頂かせてもらう心に、体を丈夫にしてくださいさる働きが現れてくるのだと思います。

私は以前、母から、祖父はお風呂に入る時には必ず手を合わせて、「頂きます」と拜んでお湯につかっていた、という話を聞きました。それから私も、お風呂に入る時、手を合わせるようになりました。

孫が生まれ、一緒に入る時にも同じようにしている、ある時、「じいちゃん、なんで、そんなことしてるの」と聞かれました。一緒にお湯につかりながら、私は、「お風呂のお湯も天地のお恵みであること。そのことに感謝し、体が元気になるように神様にお願ひしているんだ

よ」と話しました。孫は、どれほど納得したのか分かりませんが、私以外の人とお風呂に入る時にも、手を合わせ、「頂きます」と大きな声で言うてから、お湯につかるようになりました。

金光教の前の教主、金光鑑太郎様は、「水はいのちのちは水とつつしみて ひたすら思ひ水のみにけり」というお歌を詠んでおられます。

水を飲まずには生きていくことのできない私たちです。水に恵まれている日常生活の中で、水を飲む時やお風呂に入る時、水はいのちの元、神様から賜ったお恵みとして、ありがたく、謹んで頂かせてもらうことが大切だと思えます。

そして、日々、いのちの水を頂くことを通して、天地のお恵みの中に生かされていることを体で感じ、天地の恵みにお礼が言える生き方を

進めさせていただきたい。さらに、そうした生き方を、子どもや孫に、また縁ある方々にも伝えさせていただける自分にならせてもらいたいと願っています。



《信者さんのおはなし》

「今、天地の開ける音を聞いて
目を覚ませ」

ナレーション

岡山にある後樂園は三名園の一つです。今日は、そのすぐそばにある金光教岡山教会に参拝する小林芙美子さんのお話を聞かせていただきます。

小林

信心というと、何かお行儀良くして、地味と
いうか質素にというか、そういうイメージがある
と思うんですよ。だけどそれはかえって良く

なんじゃないかと。私自身もそんな地味にした
くないし、いつまでも死ぬまでおしゃれしたい
なという気持ちがあるから、自然にしてるん
です。

ナレーション

小林さんは85歳。父親は日本画家の池田遙邨
さんです。小林さんは、信心されるようになっ
た切っ掛けを次のように語ります。

小林

父が日本画で日展に属していて、芸術院賞を
もらっていたんですよ。それからずっと文化勲
章まで段階があるんです。

芸術院会員いう段階で、また今年も文化勲章

の候補に残ったけど、父はそういうことは一切もう……。「わしはあんなもんいらん」という感じだったんですけど、父にそういう気はなくても美術評論家とか周りの画商さんとか、そういう方たちが、「今度はあんたの番や」とか、周りが騒がれる。

そういうので、父も心をとらわれんように思うんだけど、どうしてもちよつとこうね……揺れ動いたり、そんなんで神経をすり減らしますし、可哀想だなみたいなき感じだったんですよ。

ナレーション

お父さんのことで悩む小林さんには、身近に信頼できる人がいました。

小林

私の仲のいいお友達が金光教の信者さんだったんですよ。金光教はどういう宗教だとか、何にも言われなかったんです。「ああ、明日は大祭やからお参りしてこよう」というような。「ああ、この人、金光教だったんだな」という、そんな程度だったんですけど。

その方、子どもが幼稚園の時から友だちで、誠に実意丁寧で、本当に温かいし、こんな人が世の中にあるんかというような方だったんですよ。本当に私、尊敬してたんでね。私も父のことを色々と話してましたし。

「明日私も連れてって、お参りしてみたいわ」と。「親孝行したいわ」という感じ。そしてらびっくりされたんですけども、「それじゃ、

一緒に行こう」と言ってくださって。

もう何にも私、その頃、宗教のことも分かりませんでしたし、とにかくその方のことを信頼していて、思わず、「連れてって」という感じになっただけですよ。

教会の先生はその時お留守で、奥様がいらっしやっただけですけど、「どういふことで来られたんですか」と。「実はおこがましいですけど親孝行したいと思って来たんです」と言いましたら、「あら、親孝行は神様が一番喜ばれることですよ。おかげを頂かれますよ」と言われて。父のそういう今の状況とか詳しく説明させていたただいたんですけどもね。

明るる日から、朝参りを始めたんですよ。それで私は、朝、弱い方だったのですが、10月

の中旬ぐらいでしたかね、「え？　こんなまだ真っ暗なのか…」と。寒かったのもありまして、星が出て、暗闇の中を自転車で15分くらいですかね。旭川の向こう側の土手を走って。その下の道から土手へ出た途端に、視界がパーっと開けて、川が流れてる、自然が、空気が、大気が、ゴーツと言うて、何か動いてるいふのを、しんしんと感じてきて、「何これ！」っていう感じで…。

何の涙か知れないけど、何か、ありがたくてありがたくて、涙が出て涙が出て、自転車走らせて教会へ行ったんですよ。

ナレーション

その時、岡山教会の朝のお祈りの後、教えに

ついでのお話がありました。

小林

「今、天地の開ける音を聞いて目を覚ませ」という教えについての話でした。それをぱつと言われて、うわつと言うか、今通ってきた景色と相まって、もう何か頭をガンと殴られたような感じで。それで聞いていたら、神様がおられて助かってくれと願ってくださってるというような、そういう、生かされてるといってお話。初めてそういう話を聞きましたから。もう何かその、朝のあれと相まって、もう本当にもう、あの感動、衝撃、それはいまだに忘れることはないんです。

もう、それを聞いてありがとうなって。それ

で帰る時、教会を一步出たら、ぱつと太陽が…。

あんな大きな太陽、見たことがないような…。

犬を連れてその辺を散歩してた人らも、「うわ

ー」と言うて、ほんと、特別な太陽だったと思

うんですよ。私はまたもう一連のつながりで、

もう感動。泣きながら家に帰りました。ありが

たくて。

何か神様がこの日を私のために演出…そんな

言い方あれですけど、私には何かそう思える、

演出してくださったどうか…。

ナレーション

その後、池田遙邨さんは亡くなるまで、自由で温かみのある画風で名作を描き続け、文化勲章を受章し、今、倉敷市美術館にはその多くの

作品が展示されています。

「幸せになるには、なる道がある。教会はそれを教えてくれる所」と小林さんは語ります。

今日も小林さんは教会にお参りし、家族、友達のことを祈ります。おしゃれで生き生きとした小林さんの周りには自然に人が集まり、一緒に明るく楽しく信心をしています。



《信者さんのおはなし》

「息子に手を差し伸べられて」

ナレーション

兵庫県の金光教山手教会にお参りする、濱田博子さん68歳は、自閉症のお子さんを持つお母さんです。幼い時の息子さんのことをお話ししていただきました。

濱田

制止が利かないというか、「自動車が来てるから、そっちに走ったらダメよ。こっちに帰っていらっしやい」って言ってもなかなか聞けなくて、自動車の方に突っ走っていくというよう

な、そんな子だったんです。

たぶんもう小さい時から、そういう症状はあったんやと思うんですけど…。長男長女はこういうことをしてなかったけど…。

ほうきの先端にひもがついていて、そのひもを一生懸命、釘に掛けようとしてるんですけど、掛からないんですよ。あの子も小さかったんで、椅子を持ってきて、椅子の上に立ってしても、やっぱり掛からなくて。

それでも一生懸命掛けてる姿を見て、その時に私は何か病気なのかなというふうに感じれば良かったんですが、「上の子はこんなに根気がなかったのに、この子はすごい根気があるなあ」っていうふうの良いように考えてたんで、自身では遅れてるとか、ちょっとおかしいん違

うかというようなことは気が付かなかったんです。

でも、隣におばがいて、そのおばがしょっちゅう遊びにきてたもんですから、「ちよつと寿君、何か診てもらった方がいいん違うかな。お兄ちゃんお姉ちゃんらと比べたら言葉も出てないし、話もしないし、してるのがちよつとおかしいような気がするから、一遍相談してみたらどう？ 児童相談所とかに行つて」というふうなことを聞いたんです。そういう、おばの口を通して私に伝えてくれたのも、やっぱり神様のお心かなと思いました。

ナレーション

児童相談所に行くつと、団体で生活する方が良

いと言われ、小学校に行くまで施設に通うことにしました。少しは変わつてくるかな、成長できると祈る思いでした。そして卒園を迎えた日のことです。

濱田

卒園の時が、私もすごく意外だったんですが、何か先生と別れる、お友達と別れるというのが、言葉もない子なのに、何か感じたのか、あの子一人泣いてたんですよ。「やあ感情があったんやな」というふうに、親もひと安心というか、寂しさを感じてる、悲しいという思いが芽生えてきたなというふうに思わせてもらった一面でしたね。

ナレーシヨン

卒園してから、養護学校に行くか地域の小学校に行くか迷いましたが、金光教の教会の先生や家族に相談して、小学校に行かせることにしました。

濱田

結局、遊ぶということが一番難しいのかな？

あの子も言葉が、思いが伝えられたらいいんですけど、伝えることが苦手で言えないので、なかなか遊べなかったのですが、まあ休み時間とかはみんなと一緒に走り回ったりとかはしておりました。

先生が、「濱田君は…寿男君は、っておっしやったかな？ 可愛い女の子が好きですね。」

可愛い女の子の後ろを一緒に走って、手をつな

いで走ってました」とおっしゃって、「やあ」と思ったんですけど。本当に良かったなあ、6年間、地域の小学校に行くことができたことで、まあ良かったのかな。中学に入る時はもう養護学校、高校も養護学校でお世話になったんです。

ナレーシヨン

濱田さんにとって、教会は安心できる場所でした。

濱田

そうですね、やっぱりもうどうしようと思つた時に教会に来て、先生にお話しさせてもらったら、やっぱり親が子どもを見る観点と全然違

った見方で見ていただけですし、何か先生のお
つしやること、「あ、そうだな」というふう
安心して、確信というか、そういうものを持
せてもらうことができましたね。

ナレーション

その寿男君も、もう40歳。今はどっしりと落
ち着きました。作業所で、チョコレートを袋に
入れる仕事をしています。また、地域の施設で、
2泊3日のショートステイをし、自立体験を
しています。

濱田

最近ちょっと階段上がる時に、ハーハー言
うんですね、私。それで寿男と一緒にいたらね、

私が、「はあー」って言いながら一歩ずつ上
ってたら、手を差し伸べてくれるんですよ。そ
れで手をつないで上がってくれて、「ああ、あ
りがとうね。ここまでいいよ」と言うと、手
を放すんですけど。そういうちょっとした気遣
いができるようになったかなと思って。

そういう行動で示してくれるようになったん
ですね。やっぱり訓練させてもらってるって
うか、色んな方と一緒に共同生活できるとい
うことで、そういう気遣いというのが少しずつ
芽生えてきているように思います。

ナレーション

寿男君の成長ぶりをうれしそうに話す濱田さ
ん。今日まで色々な方のお世話になってきたそ

うですが、中でも教会が大きな支えでした。

濱田

「お教会に来て先生に、「こうだったんです」
みたいなことを話すと、やっぱり色々と言っ
てくださることで、また安心を頂いて帰れるの
かなと思うんです。」

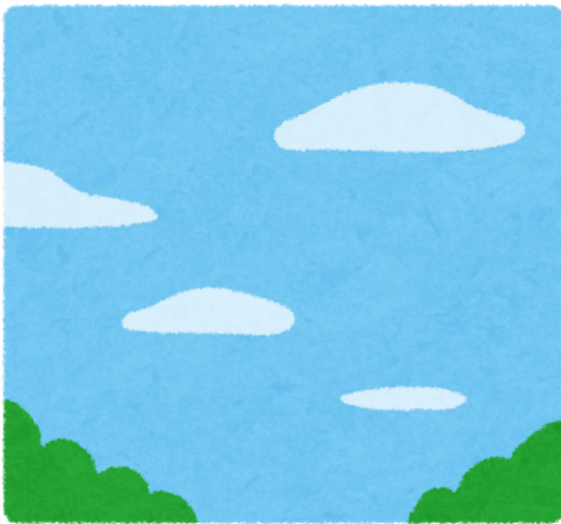
ナレーション

濱田さんは元々、心配性でした。しかし教会
にお参りすると、その心配な気持ちを神様に任
せることができ、安心な思いに変えていけるの
でしょう。

濱田さんは言います。

「私は信心していなかったら、色々とワガマ

マな気持ちが出ていたと思います。信心のお
かげで、感謝ができて、今元気に過ごしていま
す」。そう話す濱田さんの表情は、とても穏や
かでした。



《信者さんのおはなし》

「あなたのこと、祈りよるけん」

福岡県北九州市八幡。かつては、日本の鉄鋼業の中心となった官営八幡製鐵所で栄え、その施設の一部は、明治日本の産業革命遺産として、世界文化遺産に登録されています。

その八幡の町にある、金光教の教会にお参りしている、55歳の田中優一さんは、長らく出版関係の仕事をしてきました。若い頃から読書好きで、たくさんの知識を詰め込み、理論武装していたと話します。「宗教は理論的に考えてみて信じる事ができない」との思いを持っていました。

30代半ば頃、漫画家のサトウサンペイさんの『ドタンバの神頼み』という本をたまたま見掛けました。サトウサンペイさんのことは、新聞の連載で知っており、「あのサンペイさんが神様のことをどう書いているのだろうか」と、勉強のつもりで読んでみました。その本には、金光教の信心をされているサトウサンペイさんの、信心で助かっていく姿が面白く描かれていました。

当時の田中さんは、3歳になる息子の皮膚の病気がひどく、「どうにか治してあげたい」と大学病院や皮膚科を回っていました。しかし、どこに行っても、「これは治せません」と言われます。どうしたものかと悩んでいた時に、その本に出会いました。

田中さんは以前から、仕事で八幡の町を回る中で、金光教の教会を見掛けており、「サンペイさんもあのように書いていたし、一度行ってみようか」という気になりました。

初めてお参りし、教会の先生とお話をしました。先生からは、「お子さんの皮膚は、すぐには治らんかもしれないけど、いずれ治るよう一緒に神様にお祈りしていきましょう」と言われ、田中さんも、「治るか治らんか、分からんけれども、それにとらわれず、この子を支えていこう」という気持ちになりました。

「宗教嫌いから一転、神様にお祈りするようになるなんて、それほど息子を思う気持ちが強かったのでしょうね」と田中さんは話します。

それから、子どもが成長するにつれて、症状

も和らぎ、皮膚の状態も、見た目には気にならないくらいになってきました。

田中さんはお参りを続け、40歳になった頃には、「係長に昇進させてください」といつも教会でお願ひしていました。

いよいよ時期がきて、課長からも、「昇進は間違いない」と言われ、期待していましたが、なれませんでした。

がっかりして先生に、「なれませんでした」と言うと先生は、「ああ良かったですね。おかげは遅い方がいいですよ」と言われます。おかげとは、神様からの助けや恩恵といった意味です。びっくりして、「何がいいんだろう？」と思いました。

それから3年経って、やっと係長になれて、

振り返ってみると、この3年間、係長になるために、多くの課題に向き合い、神様にお願いしながら、一つひとつ乗り越えていき、人間的に成長させてもらえたことに気がきました。その時初めて、「色々と経験させてもらい、遅れて昇進させてもらって良かったな」と心から思えたのでした。

ある時先生から、「いつでも謙虚な人にならせてもらいましょう」と言われました。田中さんは、毎朝神様に、「謙虚であらせてください」とお願いし、夜には一日の反省をしました。それを続けていると、どんな人へも「さん付け」で呼ぶようになり、人それぞれが持っている良いところが見えるようになりました。さらに、素直に人を褒めることができるようになってき

ました。

「毎日の信心の積み重ねで、自分が変わり、物事の受け取り方が変わってくる。とてもありがたい」と田中さんは話します。

50代に入り、課長となった頃、急な人事異動で、職場にうつ病の方、Aさんがやってきました。Aさんは、「もう仕事はできない、職場に出て行けない、無理です」と田中さんに訴えました。

田中さんは、Aさんに話しました。「そうか、分かった。でも私はあなたのことを祈るから、出てきてくれん？ つかろうけど、出てきてくれん？ 私、絶対にあなたを守るから。おるだけでもいいから。僕は祈るけん、分かるね、あなたのことを祈りよるけん。それで神様につ

ながるけんね。それを信用して。社員集めて、みんなに病気のこと説明して、あなたを支えようって話してもいい？」。Aさんは「はい、いいです」と言いました。

社員を集め、「Aさんはうつ病です。出来るだけ、自分たちで判断できることは自分たちでやっていってくれるかな」と聞くと、「はい、分かりました。支えます」とみんなが言ってくれました。

田中さんは、毎日Aさんのことと職場のみんなのことを祈りました。Aさんはみんなに支えられながら、徐々に心の状態も良くなり、数年後、次の職場に異動していくことができました。

田中さんは当時を振り返り、「Aさんはつかっただろうけど、私のお願いを受けてくれた。

社員みんなも、Aさんが色々判断せんていように、助けようとみんなで相談して準備するようになった。みんなそれぞれに成長できたんですよ」と話します。

宗教に不信感を抱いていた若い頃から、金光教に出合い、先生からの教えに日々取り組む中で、性格や仕事の向き合い方まで変わってきました。変わることができた自分自身を、驚き、喜ぶ田中さん。教会の先生がいつも自分のことを神様に祈ってくださいているのを、とてもありがたく感じています。

祈られていることを支えに、今度は自分が、家族を始め、職場のみんなや仕事で関わる人たちのことをいつも、神様に祈りながら生活をしていきます。

《信者さんのおはなし》

「教会は元気の源」

福岡県の門司港教会にお参りしている永富佐江さんは今年57歳。2人の大学生の娘さん、そしてご主人の4人家族で、彼女も公務員として毎日充実した日々を送っています。以前は何でも悪いように考えてしまう、いわゆるネガティブだった彼女が、今では前向きに捉えられるようになったという、そのいきさつを明るく語ってくださいました。

それは佐江さんが高校1年生の冬休みのことでした。それまで一家の大黒柱だったお父さんが体調を崩して入院をしました。検査の結果、

肝臓にがんが見つかりました。思ったより病状は悪く、手術する間もなく、入院後、たった1カ月で亡くなってしまうのです。大黒柱を失ったことで一家の生活は一変してしまいました。しかしいつまでも悲しんでばかりいられません。今度は、今まで専業主婦だったお母さんが、お父さんに代わって娘3人を育てなければならなくなりました。

40歳を過ぎて初めて勤めに出るようになったお母さんを頼りに、女4人、力を合わせての生活が始まりました。ところが、今度はそのお母さんにもがんが見つかったのです。

平成に入ったある日、お母さんが、「どうも胃の辺りがおかしい」と言うので病院で診てもらうことになりました。検査の結果はがん。お

父さんを奪った、あのがんです。

幸い初期だったのですが、手術を受け、仕事にも復帰できたのですが、心配なのは再発でした。病院の先生の話では、「3年間、何もなければ大丈夫」とのことです。ところがその3年後、血液検査に異常が現れたのです。佐江さんは居ても立ってもいられない気持ちになりました。

「やっとその3年が来て、これから家族4人、安心して生活しようとしている矢先なのに、なぜ…。みんな真面目に生きてきたのに…。」お父さんに続いて大切な、大好きなお母さんも失ってしまうのでは…。そう思うとたまらなくなり、心が張り裂けそうになるのです。佐江さんたちを育ててくれた大切なお母さんです。失い

たくない。そんな時、思い出したのが、当時同じ小学校で働いていた4歳年下の女性、養護教員の牟田先生のことでした。

牟田先生はとにかく明るい先生でした。食事をするといつも、「ああ、おいしかった。幸せ」。ありがたいなあ」。そんな牟田先生と話をしていると、佐江さんも元気が出てくるのです。

実はその牟田先生の実家が金光教の教会だったのです。最初の頃はそのことを知らなかったのですが、親しく話をしているうちに、だんだん会話の中に金光教の教えが出てくるのです。牟田先生の育った金光教の教会なら、きっとお母さんを助けてくれる。そう思えるようになったのでした。

いざ教会へお参りすると、勇気が要り

ました。しかし、どうしてもお母さんを助け
てもらいたい、その一心で教会の門をくぐりま
した。

そして佐江さんは、牟田先生のお父さんであ
る教会長先生に、お母さんのことを話したので
す。話をしているうちに、佐江さんは不思議な
感覚を覚えていました。お父さんを亡くしてか
ら、ずっと佐江さんの心の中にあつた何かよく
分からない正体不明の塊が溶けて、今まで頑な
に一人で抱えていた重い荷物を、やっと下ろす
ことができたのでした。

実は、教会にお参りする前も、一人で色んな
神様に、お母さんの無事をお願いしていました。
ただ、神様といっても、どんな神様なのか分か
らない、いつもただ一人で願うだけです。

ところが金光教の教会は違いました。話を聞
いてくれるだけでなく、神様のお話を聞かせて
いただける。そして、願いを神様に一緒に願っ
てくださる。「もう私は一人ではないんだ」、
そう思っただけで、佐江さんの心は勇気で満た
されてきました。そして、なぜか、「絶対にお
かげが受けられる」。そんな気がしてきたので
す。

お母さんの血液検査の異常値はその時だけ
で、それからはずっと正常値に落ち着きました。
今年、元気に83歳を迎えたお母さんの病気の
ことから始まった教会参拝は、28年経った今で
も続いています。教会にお参りし、先生と話を
していると心が落ち着き、元気が出てくるので
す。おかげで、お母さんのことだけでなく、佐

江さん自身も考え方が前向きに変わってきてくると
いうお育てを頂きました。

しかし、全ての物事を前向きに捉えられるよ
うになったかという点、なかなかそうはいきま
せん。仕事をしていても今でもつまづくことだ
らけです。

ある日、教会で先生に、「私って、つまづく
ことだらけなんです。大学だって、第一志望は
ダメだったし」。そう言うと、先生は、「だか
らいいんですよ」と言われるのです。「もしも
一度もつまづかないでスツと登ったら、落ちる
時もやはり一気に下まで落ちてしまう。だけど
ね佐江さん、つまづきながら、ぶつかりながら
登ったら、もし落ちることがあっても、途中で
ぶつかるので下までは落ちませんよ」。そう言

われるのです。佐江さんは笑ってこう答えまし
た。「だったら、私、大丈夫です」。

佐江さんは言います。「世の中には以前の私
のように、心配で心が潰されそうになっている
人が大勢いるはずですよ。そんな一人ひとりが、
私のように一人で苦しまないで、神様に助けて
いただくことのありがたさを知ってもらいたい
のです。今度は私が、そんな人たちの手助けを
したいのです」。

そう話す佐江さんの笑顔には、優しい強さが
うかがえました。

《信者さんのおはなし》

「一生死なない親に守られて」

ナレーション

兵庫県西宮市、香櫨園教会に参拝する田所由里さん、66歳。

教会から2キロ南に、さくら夙川という駅があります。名前の通り、夙川の河川敷は、春になると美しい桜が咲き誇り、たくさんの方が訪れます。穏やかで気品ある由里さんは、人々の心を和ませる優美な桜を思わせます。

専業主婦の由里さんは、現在、夫と2人暮らし。40年以上前、夫の祖父との出会いが金光教との出会いでした。祖父の姿がとても心に残っ

ています。

田所

主人の祖父が70歳の時に病気をして、その時に信心されるようになって、大病が治って100歳まで長生きさせていただいたんですけれども。義祖父の家にも大きな神棚がありましたし、義父の家にも立派な神棚があり、それで初めて金光教を知りました。

婚約した時、義祖父は80代後半だったと思いますけど、その時から：最後は白内障で目がほとんど見えなくて、耳も最初から遠かったのです。そんな状態でしたけれども、朝晩1時間拜んでおられるんです、神様の前で。

私の目には、神様というような感じに映って

ましたね。生きた神様という感じでした。

90歳を過ぎて白内障でどんどん目が悪くなって、目が段々見えなくなつて、かすかに耳が聞こえるぐらいで、私たちが行つて、こうやって手を握つて、「こんにちは」つて言うと、大きな声で、「よう来た、よう来た」つて言つて、いつも手を握つてくださつていたんですけど、「お前たちのことは守つてやるからのう」といつも言つてくださつてたんです。

だから、「あ、守つてくださるんだ」というのが実感としてありましたね。神様みたいな、目も見えない、耳もほとんど聞こえない…暗闇ですつとおられて気が変にならないのかなと思つていました。私、若かったですから、まだ20代で。

あれだけ「神様のおかげや、おかげや」つていうことしか言つてなかつたんで、「おかげじやのう、おかげじやのう」つて、その言葉しか私は思い出せないぐらい、口癖のように言つておられたんです。

ナレーシヨン

由里さんは自然と信心するようになりました。教会にお参りし、先生から教えを聞いていくうちに、由里さんの中で神様の存在が確かなつていきました。

田所

私の心の中に残っているのは、「神様は親で、一生死なない親の神様がいてくださるから」と

いう先生の言葉です。親に守られているような
気持ちで神様に接しているかなと思います。見
守ってくださっていると信じています。

ナレーション

幼い頃、小児ぜんそくを患ったことがあり、
あまり体が丈夫でない由里さんは、今日一日を
元気で無事に過ごせるように、毎日神様にお願
いします。

田所

「どんなことでも神様に…小さいこと大きな
こと関係なく、何でもお願いしたら良いように
してください」って先生がいつもおっしゃって
くださるんですけど、本当にその通りだと思い

まして、私は心配なこと…何かあってもとにか
く神様にお願ひしているから、お届けしてお願
ひしてたら、ただそれだけで神様が全部良いよ
うにしてくださいさるって私はすごく信じていま
すので、もう本当に心が楽です。

神様が全て良いようにしてくださいさる、良いよ
うにしていただけなので、「自分が自分」つ
て無理に思わなくていいですし、心がすごく楽
になります。神様にお任せしたら、結局何でも
良いように今までしていただいているので、安
心してお任せして、本当に楽になりました。

ナレーション

どんなことでも神様にお願ひして毎日を過ご
す由里さん。神様の働きをどのように感じてい

るのでしょうか。

んだと思います。

田所

おかげっていうのは、私の中では数えられないくらいいっぱいなんです。

ナレーション

義祖父や義父の信心を受け継いだ由里さんは、信心が代々伝わるように願っています。

毎日何もなく、寝付くこともなく、一日が無事過ごせたっていうことが、私の中ではものすごく大きなおかげなんです。呼吸器もあまり丈夫でないもんですから、息が楽に吸えるっていうことが、私にとってはものすごくありがたいことなんです。

田所

義祖父や義父が私たちに信心してほしいって願ってくれていたのは、私たちが幸せに暮らしていったほしいっていうのが根底にあるからだと思えます。

全てのことでおかげを頂いてるなと思います。

お願いしておかげを頂いてないと回らないと言いますか、生活がきつと成り立っていかない

それは、私が今こうやって信心させていただくようになって、すごくよく分かるので、私も今度は、子どもや孫たちが、ずっと今までのように幸せに暮らしていただきたいと思います。

思うので、やっぱりそのためには信心が必要だと絶対思ってますので、信心していつくればたらうれしいって思ってるんです。

信心していたら生活が保障されてるっていうような感じなんです、私の中では。

ナレーション

喜びあふれる笑顔の中に、神様に守られている安心感がうかがえました。

どんな事も神様にお願いし、お任せして心が楽になるという由里さん。

曇りのない、澄み切った真っ直ぐな心が神様に届き、安心の毎日を過ごせているのだと感じました。



《信者さんのおはなし》

「お邪魔にならない生き方をなさい」

横山和光さんは、陶磁器で有名な、愛知県瀬戸市に生まれ育ちました。

時は昭和32年の春、当時16歳だった横山さんは、病の抜けきらないフラフラの体で、母親に伴われ、初めて金光教瀬戸教会の門をくぐりました。

その1年前、彼は厳しい受験競争を勝ち抜いて、ある名門高校に進学し、張り切って勉強を始めました。ところがそのわずか1カ月後に、胸膜炎になってしまったのです。長期間の安静

が必要となり、学校に休学届を出して、自宅や病院で療養しましたが、体がスッキリしないまま、早くも次の春がやってきたのでした。横山さんは不安と焦りに押し潰されそうでした。お母さんが教会に連れて行ってくれたのは、そんな時のことだったのです。

教会の先生は、信者さんたちから、「親先生」「親奥様」と呼ばれて慕われている70代のご夫婦でした。お2人は初対面とは思えないほど親しく温かく迎え入れてくださり、真剣に話を聞き、神様に一緒にお祈りしてくださいました。

特に横山さんの心を動かしたのは、親奥様の優しくも力強い励ましの言葉でした。

「神様におすがりしていれば必ず助けていただけます。私も一生懸命お願い致しますから、

しつかり信心して、おかげを受けてください」

彼はこの時、「ここで信心を教えてください、助けていただこう」と決意したのです。

高校には退学届を出し、しばらくは自宅で安静を保ちました。次に、体力を付けるために、教会の近くの工場で体に合う仕事をもらいました。仕事帰りには教会にお参りし、親奥様と話をします。親奥様は、信心に基づく生活の仕方について、事細かに教えてくださいました。

この中で何度もおつしやつたのは、「お邪魔にならない生き方をなさい」ということでした。

若者に向けた言葉にしては、少し消極的な感じもしますが、おそらくこれは、一つには、ただ体の調子が整わない横山さんに対する心遣い

でもあったのでしょう。焦って無理をしてはいけない。今は身近なところから、細やかな心配りをする稽古をなさい。そんな意味で言われたのではないでしょうか。

また一つには、自分の力を過信していると、役に立つつもりが、かえって迷惑になることもある。どこまでも人の立場を思いやる謙虚な生き方をしていくようと、促されたのではないのでしょうか。

「お便所でも銭湯でも、履き物が脱ぎ散らかしてあつたら、他の人の履き物もそろえてあげらるんですよ」

そんな親奥様の話を聞きながら、横山さんは、「なるほど、信心する人は、こういう丁寧な心配りをしていくんだな」と、ストンと腑ふに落ち

る気がしました。

ようやく体力が回復し、改めて高校に入り直したのは、20歳になってからのことでした。読書が好きで、図書館で仕事をするにあこがれていた彼は、この夢に向けて、働きながら定時制高校に通うことにしたのです。

彼の周りの人々は、できる限りの協力を惜しみませんでした。ある人は、家で無理なく働けるようにと、良い内職をあっせんしてくれました。また近所のある人は、「それよりうちの工場に来なさい」と言って働かせてくれ、通学には、自分のスクーターを貸してくれました。

4年間の定時制高校を終えた後は、夜間の短期大学に進みましたが、その時にも、ある会社が雇い入れ、大学に通いやすいよう配慮してく

れました。

横山さんは在学中に図書館司書の講習を受け、同じ大学の図書館に正規採用されました。勤めていた会社の方々も、彼の努力が実ったことを喜び、快く送り出してくれました。こうして同じ大学で勉強も仕事もすることができたのです。

このように、多くの人が味方になってくれたのも、横山さんの誠実さが広く信用を得たからに他なりません。親奥様の教えのとおり、誰も見ていない所でも人のために真心を尽くし、心配りを行き届かせる生き方が、人々の心を動かしたのです。

この生き方は、図書館での仕事の上にも貫かれました。欲しい本が貸し出し中になっていて、

がっかりしている学生たちには、「どんなことを調べたいの？　じゃあ、この本はどうか。

同じことが違った角度から書かれていて、いい勉強になるよ」と、丁寧に応答をします。

学生にとって横山さんは、実に頼もしく、ありがたい存在でした。卒業生たちから、「この大学で一番楽しかったのは、図書館で勉強させてもらったことだ」とお礼の便りが届くこともありました。

こうした実直な働きぶりが認められ、やがてその図書館の責任者となり、図書館関連の様々な全国組織の中でも、頼られる存在となっていたのです。

横山さんの仕事上のモットーは、「潤滑油になる」ということでした。自分1人でできるこ

となど何も無い。自分の務めは、職員の仕事や、学生の皆さんの勉強がスムーズにできるよう、お世話をさせていただくことだと言うのです。

この謙虚さも親奥様の教えからきているのでしよう。

社会人としてのスタートは人より数年遅れましたが、教会で信心を教えていただいた青年時代は、その後の人生の土台を築く、とても大切な時間となりました。

退職後も、町内会のお世話や、教会のさまざまなた活動に心を込めて取り組む横山さん。そのまぶたの裏には、「お邪魔にならない生き方なさい」と導いてくださった、在りし日の親奥様の優しい笑顔が今も映っているのです。

《信者さんのおはなし》

「つらい顔は息子に見せない」

岡山市の東部、のどかな田園風景の中、山際

の緑豊かな集落に金光教豊原教会があります。

出射宏子さんは、現在74歳。毎朝、この豊原教会に参拝しています。

8年前にご主人を亡くし、一人息子は、関東で暮らしているため、今は一人暮らしです。「でも、全然、寂しくないんです」と宏子さんは話します。

母親想いの息子さんが、毎日、メールを送ってくれるのです。それも朝晩2回です。どんなに仕事が忙しくても、夜中になっても、メール

をくれるのです。その上、月に1度は、2人の孫が写った家族写真を小さなアルバムにして送ってきてくれるので、離れていても、一緒に暮らしているようだと、幸せそうに宏子さんは話します。

実家の母親が、金光教の信心をしていたこともあり、子どもの頃から教会にお参りしていた宏子さんですが、自分から進んでお参りを始めたのは、37歳の時です。当時、結婚してもなかなか子どもが授からず、諦めかけていたのですが、そのことで、実家の母に、つらい思いをさせていると感じたことが切っ掛けでした。

「おかげを頂きたい」と本気で願うようになり、自らお参りするようになって、翌年、長男を授かったのです。そして宏子さんは、ます

ます信心に取り組むようになりました。

子どもの誕生を機に、教会にお参りしては、「どうぞ、心身共に健やかで、お役に立つ子に育てさせてください。そして親孝行してもらえらるような親にならせてください」と神様に願うようになりました。

教会の先生は、その願いを聞いて、「そういう大きな願いは、時間が掛かるものじゃから、途中で信心を投げ出さんように、しっかりおかげを頂きましょう」と励ましてくださり、親子そろってお参りをするようになりました。

そんな中、息子が小学校1年生の時です。夫が不況のあおりを受けてリストラされてしまい、やがて昼間からお酒を飲むようになったのです。徐々にお酒の量も増え、アルコール依存

症になってしまった夫は、以前からの糖尿病も進み、入退院を繰り返しました。

同居していた夫の両親を含め、家族の生活を支えるため、宏子さんは、炊事や洗濯などの家事をこなしながら、仕事にも精を出しました。

お酒に溺れる夫と、夫の両親、そして小さな息子を抱え、つらい毎日が続きました。宏子さんは、仕事の帰りに教会に参拝しては、苦しい胸のうちを先生に聞いてもらい、泣きながら訴えることもしばしばありました。先生は、いつも温かく迎えてくださり、時には、一緒に涙を流しながら励ましてくださいました。

教会の先生の祈りと励ましに加え、宏子さんに力を与えてくれたのは、里の母親のかつての姿でした。

宏子さんがまだ子どもの頃のことです。父親

い母の姿があります。

が仕事中の事故で失明してしまいました。母は、一人働いて、宏子さんを含め4人の子どもを育ててくれたのです。目が見えなくなり、仕事ができなくなった父親を、母は一度も責めることはありませんでした。

それは初めての国体に出場した時のこと。会場は遠く離れた秋田県でした。岡山から旅費の工面だけでも大変な中、母親は宏子さんの制服の裏生地をほどき、外から見えないように1万円札をはさんで縫い付けてくれたのです。

そして、自分たち子どもに対しては、「大人になって社会に出たら、死にたいぐらいつらいことも起きてくる。それに耐えていくには、学生時代に、しっかりと楽しんでおかないと、いい人生は送れない」と言って、アルバイトもさせず、それぞれ好きなスポーツに打ち込ませてくれたのです。

「もしも、途中でみんなとはぐれてしまったら、困ることになるじゃろう。その時には、この1万円円で切符を買って帰っておいで。お母ちゃんたちは、その間、塩を掛けてご飯食べても生きていられるから、心配せんでええ。お母ちゃんはついて行けんから、これがお母ちゃんじゃと思うてな、1万円入れさせてくれえ」

宏子さんは、高校生の時、フェンシングで2度、国体に出場したのですが、今でも忘れらな

自分のことをそこまで考えてくれる母の姿に涙が出ました。

目の見えなくなつた父を支え、自分たち姉弟を育ててくれたそんな母の姿が、つらく厳しい状況の自分と重なりました。

宏子さんは常に、「息子が良い子に育つように。自分が良い親にならせてもらえるように」と神様に祈り、この願いがかなうためには、夫や夫の両親に不満を言わないように、子ども前ではつらい表情は見せないようにという、教会の先生の教えに取り組んだのです。

つらいことや苦しい思いは、教会にお参りして、神様の前で全て先生に吐き出しました。車の中やお風呂の中で一人泣くことはあつても、子ども前では決してつらい表情は見せないように、いつも明るく振る舞うように努めました。

その努力のかいあつて、息子は母親想いの本

当に優しい子に育ちました。今では2人の娘の父親です。

今、宏子さんは幸せに暮らしています。あつらく苦しい中を乗り越えることができ、こうして穏やかに安心して過ごしているのは、教会の先生のおかげ、母から受け継いだ金光教の信心のおかげだと、宏子さんは感じ、今日も教会へのお参りを続けています。



《信者さんのおはなし》

「よう来たなあ」

「『ガラガラッ』と教会の玄関の扉を開けると、いつも先生が、『おおっ、よう来たなあ』と優しい笑顔で迎えてくれました。当時中学生だった私は、テスト前、少しでも良い点が取れるようにと、時間割の書いた紙を先生に差し出したんです。そうしたら先生は、温かい笑顔で、『よっしゃ、よっしゃ。お願いしてあげる』と、受け取ってくれたんですよ」。そう話してくれたのは、名古屋の堀田教会に参拝している丹羽真弓さんです。

真弓さんは、熱心な金光教の信者だったお母

さんに連れられ、小学校の頃から教会にお参りしていました。が、20歳を過ぎ、就職した頃からは、教会から足が遠ざかっていました。そして、真弓さんが36歳の時、あの優しかった先代の先生が亡くなったことを聞き、葬儀に駆けつけました。

その時、先代の息子さんが、「これから先代の先生は、御霊みたまの神様になるために50日間修行をするんだよ」というお話を聞かせてくれました。真弓さんは「修行」とは何をするのかわからないながらも、「大好きだった先生と、私も一緒に修行をしたい」と思いました。

建築事務所にお勤めの真弓さんは、その日から50日間のつもりで、とにかく会社が終わった後、教会に参拝することにしました。

始めのうちは、「優しかった先代の先生にお礼がしたい」ということと、「参拝をすると母が喜ぶから」という気持ちが強かったのですが、そのうち自然と、会社であったことや、悩んでいることなどを、教会の跡を継いだ今の先生に聞いてもらうようになっていきました。

真弓さんには6人の兄妹がいました。大所帯で、経済的に大変だった家を支えていたお母さんが、熱心に信仰していた金光教の神様とは、どんなものなのか。その頃の真弓さんは、もっと知りたくなっていたのでした。

真弓さんが40歳の時のことです。その頃、真弓さんのお母さんは足が不自由になり、年齢的なこともあって、古くて使い勝手の悪い家で暮らすことが大変になってきました。

真弓さんは、これまで苦勞してきたお母さんを新しい家に住まわせ、樂をさせてあげたいと常々思っていました。けれども、真弓さん一人の家を買うということは、宝くじにでも当たらなければできないことだと思っていました。

しかし、この思いを知った先生から、次のような力強い教えをいただきました。「自分の力ではできない大きなお願いだからこそ、神様ですがっていこう」と後押しをしてもらい、「家を購入したい」という大きな願いを立てたのです。

ほどなくして、とても良いマンションが見つかりました。日当たりが良く、教会も近く、お母さんは一目で気に入ったようでした。けれども、どう考えても真弓さんには大きな買い物。

頭金が不動産屋さんの提示した金額に届きません。

どうしたものかと思いつながら不動産屋さんに行くと、事情を知つてのことなのか、「頭金は、今ある手持ちのお金でいいですよ」と言われ、思い掛けず契約が整いました。

真弓さんは、驚きながらも、親を思う気持ちを神様がくんでくださったと思え、ありがたい気持ちでいっぱいになりました。そして、お母さんが、どんなに苦しい時も放さずにずっときた神様はこういう神様だったのかと分かったのです。

月日は経ち、真弓さんのお母さんは亡くなり、お父さんと2人の生活が始まりました。お父さんも年を取り、入院や手術をする中で、真弓さ

んは仕事をしながらお父さんのお世話をしました。しかし、お母さんに対する親孝行な思いとは裏腹に、お父さんに対してはどうしても同じ思いになれないのでした。

そこには、自分たちが幼かった頃、お父さんがどれだけ父親らしいことをしてくれたのか、という思いがあったからです。お母さんからの愛情が深かっただけに、お父さんへの反発が増していくのでした。そんな自分が嫌で、何とか変わりたいと思いつながらも変わらない。教会で聞き取りたいお話が、かえってつらくなる時もありました。

そんな思いを正直に、ありのままにぶちまけられるのが、教会のお結界という場でした。頭の中ではそんなことを思つてはいけなないと思

ながらも、父に対する許せないという自分の思いを、全て教会の先生は聞いてくれました。そして、そのことをとがめることもなく、優しく受け止めてくださいました。先生は、「あなたの代わりに私がお礼とお詫びをするから」と、どうにもならない気持ちを全て受け止め、祈ってくれました。

お結界でのこのやり取りで、真弓さんは、うれしく救われた思いになりました。そして、なかなか変わらない自分が申し訳なく、神様が喜んでくださるように、一つの工夫を試してみようという気持ちになったのです。

それは、寝る前に家の御神前でお祈りする時、「今日も一日、結構な一日でした」と、最後に言うことです。それだけのことでしたが、その

思いにほど遠い一日であったとしても、その言葉を唱えると、なぜか安心した気持ちになり、眠れるのでした。そして、お父さんとの関係も少しずつ良くなっていきました。

いつでも、どんな自分でも、「よう来たなあ」と受け止めてくださる神様のいる教会は、真弓さんの心のよりどころになっています。



金光教本部 ラジオ放送係

住所 〒719-0111
岡山県浅口市金光町大谷320

電話 0865-42-6453

FAX 0865-42-2114

メール w-master@konkokyo.or.jp

KONKOKYO

ニッポン放送 日曜日 あさ4時30分

東海ラジオ放送 金曜日 あさ5時25分

朝日放送 日曜日 あさ5時30分

RKB毎日放送 日曜日 あさ6時50分

ここで聴くおはなし

検索

